

健康教育・ヘルスプロモーションにおける 「実践報告」論文の意義と役割

お茶の水女子大学大学院人間文化創成科学研究科 赤松利恵

本学会では、健康教育・ヘルスプロモーションに関する研究と実践の両方を重要だと考えている。これは、研究と実践が独立してそれぞれ重要という意味ではない。健康教育・ヘルスプロモーションの発展には、研究と実践相互の行き来が必要であるという意味である。たとえば、交絡要因を調整したりして、統計的に解析された研究結果は、いわゆる「きれいな」結果であるが、本当に現場で使えるの？という疑問が出てくる。そこで、実際、現場でその研究成果を実践してみると、研究ではみられなかった問題点が見つかる。そして、その問題を解決するための研究が必要になる。このように、研究と実践の間を行ったり来たりしながら、研究も実践も前進する。これが、健康教育・ヘルスプロモーション分野の研究の特徴である。

このような背景から、本学会誌では、「実践報告」という投稿論文の種類を設けている。しかしながら、他の論文種類に比べ、投稿数は少ない。その原因として、よい実践をしているが論文にまとめる必要性を感じていない（主に実践家）、「実践報告」は他の論文より劣るものだから「実践報告」の論文は書かない（主に研究者）といったものが考えられる。「実践報告」に対するこの2つのイメージを払しょくする経緯を紹介したい。

2008年本学会誌に「行動変容段階モデルを用いた小学校における食に関する指導の実践事例」という「実践報告」の論文を報告した¹⁾。この論文は、他学会誌でリジェクトになり、本学会誌に投稿し、採用された論文である。他学

会誌でのリジェクトの理由は、たった一校で行ったものだから一般化が難しいというものであった。投稿者としては、禁煙教育で開発された行動変容段階モデルを、小学校の食育に適用した新しい試みを報告したかったのだが、査読者にその意図が伝わらなかった。しかし、本学会誌のおかげで、この論文は形になった。ある日、たまたま読んだ論文がこの実践をもとに開発した介入研究の論文であった。このとき、たった一校の実践事例が次の研究のステップになったとうれしく思うと同時に、改めて「実践報告」の論文の意義を実感した。

研究は1つ1つの積み重ねである。今では健康教育になくてはならない行動変容段階モデルでさえ、禁煙成功者一人一人のインタビューから開発されている。先に紹介した「実践報告」論文も、たった一校の事例ではあるが、この論文をもとに別の学校で実践されれば、その実践事例は積み重なっていく。そして、新しい理論やモデルの開発につながっていくかもしれない。これは誰かが「実践報告」として論文を発表しない限り始まらないのである。

他に「実践報告」の論文が少ない原因として、「実践報告」の論文を投稿したいけど書き方がわからないということも考えられる。今回の特別号がそういう人たちの参考になれば幸いである。たとえば、本誌の中で、久保らは「熊本県産食材を用いたバランス弁当による職域喫食プログラムのプロセス評価」と題して、職域で実践したプログラムを報告している²⁾。注目していただきたいのは、実践内容(論文でいう方法)

が丁寧に書かれている点である。事業実施の予算確保やバランス弁当提供業者との打合せなどは、通常原著論文では省略される内容である。また、考察において、本事業の課題と今後の展開に向けた課題をまとめている点も、「実践報告」では重要なポイントである。健康教育・ヘルスプロモーションは、plan（計画）-do（実施）-see（評価）の流れで実践され、seeの後には、必ずフィードバックが行われる。実践後の課題がフィードバックされることにより、プログラムが見直され、よりよいものとなる。これらの内容は、同じようなプログラムを考えている実践家および研究者にとって、貴重な情報である。

このように、「実践報告」論文は、他の論文と異なる性質を持ち、よりよい健康教育・ヘルスプロモーションの研究と実践に欠かせない。この特別号をきっかけに、今後「実践報告」の論文が増えることを期待する。

文 献

- 1) 赤松利恵, 永橋久文. 行動変容段階モデルを用いた小学校における食に関する指導の実践事例. 日健教誌. 2008; 16: 31-40.
- 2) 久保彰子, 武見ゆかり. 熊本県産食材を用いたバランス弁当による職域喫食プログラムのプロセス評価. 日健教誌. 2012; 20: 18-31.

(受付 2012. 1. 26.; 受理 2012. 1. 28.)